コミュニティデザイン Journal vol. 34

2021年1月15日

KCDラボで検索！

KOBE北・コミュニティデザインLab. 研究所

社会福祉法人陽気会

巻頭言―ラカンの世界―

少し遅くなりましたが、あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。今回はジャック・ラカンのお話をします。ラカンはフロイトの精神分析学を構造主義的に発展させたフランスの精神科医であり、哲学者・精神分析家です。フロイトといえば、精神分析で有名なので少しくらい耳にしたことがあるかと思いますが、ラカンはその精神分析をより突き詰めた人です。でも、「ラカンはわからん！！」といわれるくらいにとても難解なので、また改めてじっくりと取り上げたいと思いますが、その一端にふれていただき、少しでもその魅力を感じていただければと思います。

私たちは、いま、この「現実」を生きているのですが、実は「現実」そのものを認識することはできません。「はぁ？」と思われるかもしれまんが、フロイトの理論をふまえてラカンはそのように考えました。乳児は生後しばらくの間は母親と“一体的”な時間を過ごしますが、やがて母親をはじめとして“他者”を認識するようになります。そして、言葉を口にするようになります。たとえば「ママ…」というように。

このように自分をいま抱きかかえてくれている人を「ママ」と呼ぶようになるのですが、実はその「ママ」は、もはや“ママそのもの”ではなくなっているのです。たとえば、「ママは全然、私のことをわかってくれていない」というようなことを思ったことがあるでしょう。つまり、“わかってくれているはず”だと思っていたのに、そうではないということに傷ついたり、怒りが生じたりするのですが、こうしたことは母子関係にかかわらず、広く対人関係ではよくあります。

私たちは他者を含めて物事を認識するとき、言葉を用います。つまり、いま目の前にいる「人」を「ママ」として認識するのですが、そのときすでに“ママそのもの”を認識しているわけではなくて、自分なりに“ママ”なるものを言葉で象徴的に理解しているのです。つまり、“存在” を“言葉＝象徴”に置き換えることで認識しているのです。だからママは“わかってくれているはず”だと、私がそう思っていただけなので、状況にもよりますが、別にママが悪いわけではないのです。

このように私たちは、現実そのもの（ラカンは『現実界』といいます）に触れることはできず、『象徴界』の作用するなかで、自分なりにイメージと意味とで構成される『想像界』を生きているのです。だから、たとえば「世界とは？」と問われたときに、10人いれば、10人ともその説明の仕方は異なります。世界なるものはあるのですが、世界そのものを認識することはできず、その人なりのイメージで語るしかないのです。そして、この「私」についても同様です！！　私たちは、自分がどのような人間なのか、自分で説明しますし、他者から説明してもらうこともできますが、いくら説明しても、“私そのもの”には到達しません。「私って人見知りなんです」と言う場合でも、自分をそのような観点から切り取って自分で自分を説明しているに過ぎません。こうしたことをふまえると、人生に夢をもつことも、逆に絶望することも、『想像界』における私の“幻想”なのです。

-初日の出-

ところで、このようにイメージや意味でできているのが『想像界』ですが、純粋なイメージや意味は存在しません。人間の体験や認識は常に“言葉”が先行しています。言葉には、シニフィアン（音）とシニフィエ（意味）がありますが、言葉とその対象物というように、1対1の対応関係にあるわけではありません。たとえば「ハト」という場合、鳥類の「鳩」を示している場合もあれば、「平和」や「祝福」の意味や、「穏健派」という意味で用いる場合もあります。ある言葉の意味は、ほかの言葉との関係や文脈・状況（context）に応じて定まってきます。こうした意味やイメージを規定しているのが『象徴界』（＝無意識）で、それは言葉だけでできています。そしてラカンはこうした『象徴界』をシニフィアンで構造化されたシステムだと考えました。シニフィアンつまり「音」のほうに着目したところがポイントです。よく「ど忘れ」や「言い間違い」は無意識の抑圧によるものだと説明されます。意識していなくてもイヤな体験などに関連することと“発音”が似通っている場合などに、そうしたことが生じるのです。「Yahoo!」を「ヤホー」と言い間違える漫才コンビのボケでは、「ヤフーでしょ!!」というツッコミがあって笑いが起こります。暗黙の前提をあえて崩す笑いには抑圧や緊張を解放するという精神分析的な意味もありそうですね。まだ、終わりそうにないので、続きは次号で！　KCDラボ代表 松端克文

シリーズ　情勢分析と運営・実践の処方箋
今月のテーマ：「地域福祉」という捉え方（1）

◆「地域福祉」をめぐって

今日の社会福祉においては、直接的に「地域福祉」という表現が用いられていなくても、地域包括ケアシステムや生活支援コーディネーター、地域生活移行、あるいは生活困窮者自立支援法、さらには今日の「地域共生社会」をめぐる政策や実践に関する議論などにおいても、地域福祉として論じられたり、解釈されたりすることが多い状況にあるといえる。

すなわち、高齢者福祉や障害者福祉、あるいは生活困窮者支援などの社会福祉の各領域における議論でも、「地域」においてといった観点から捉えてみると、地域福祉として解することができるのである。また、実践においても近年よく用いられる「地域を基盤としたソーシャルワーク」や「コミュニティソーシャルワーク」に関する議論は、地域福祉の実践として論じられることが多い。こうしたことをふまえると、社会福祉にかかわる場合には、「地域福祉」について理解しておくことは必要不可欠である。したがって、今回から3回にわたって地域福祉の捉え方について確認してみる。

◆「地域福祉」の誕生

日本では戦後、憲法において社会福祉という用語が用いられるようになった。この社会福祉という概念が浸透していく状況において、そうした社会福祉という概念では語りつくせない"なにか"があるために、そこから分化するかたちで「地域福祉」という概念が用いられるようになった。時期的には1950年代から「地域福祉」という用語が使われているが、最初に「地域福祉」という用語が刊行物で用いられたのは1963年の日本生命済生会発行の『季刊地域福祉』である。また、1962年に全社協により示された『社会福祉協議会基本要項』では、地域福祉という用語は用いられていないものの、社会福祉協議会が担うべき機能としてコミュニティオーガニゼーションの方法をふまえた「住民主体の原則」のもと、地域住民の協働促進や関係機関・団体・施設との連絡・調整、組織活動などの必要性が示され、内容的には「地域福祉」として論じられることと重なっている。

戦前では、地域における「結（ユイ）」や「講」などの相互扶助や方面委員制度のもとでの方面委員活動、あるいはセツルメント活動などが地域福祉の源流とされるが、そこにはある種の共通項を見出すことができる。学術書としては岡村重夫が1970年に『地域福祉研究』、1974年に『地域福祉論』を著している。また、1973年には住谷馨・右田紀久恵編『現代の地域福祉』も著されており、このころに地域福祉という概念が研究対象となり、理論化が図られはじめたといる。

◆「地域福祉」ではなにを課題としていたのか

では、社会福祉としてではなく、地域福祉として語るべき必要性とはなにであったのか。1960年代から1970年代にかけての時期は高度経済成長期であり、産業化・都市化・核家族が急速に進み、過疎・過密問題などによる地域社会の変貌が社会問題とされはじめた時期である。また高齢化率が7％を突破し、いわゆる「高齢化社会」へと移行していく時期でもあり、社会福祉施設のみならず在宅福祉サービスの必要性が認識されはじめ、政策的にもコミュニティへの関心が高まった時期であった。

こうしたことをふまえると、「地域福祉」は高齢者福祉が「高齢者」を対象としており、障害者福祉が「障害者」を対象としているように、ほかの社会福祉の分野論と同様に、「地域」を対象として、そこでの取り組み（たとえば「結」や「講」）や実践（たとえば方面委員制度やセツルメント）、あるいは「地域」への働きかけ（たとえば地域組織化）のあり方に焦点をあてた社会福祉であったといえる。

先の地域福祉の源流とされる「結」や「講」は、前者は田植えや稲刈りなどの際の村落での共同作業あるいは労力を交換し合う形態であるし、後者は村落での任意参加型の相互扶助組織であり、「頼母子講」や「無尽講」という場合には救済的な相互扶助が行われていたとされている。また、今日の民生委員児童委員制度の前進である方面委員制度や、隣保館事業などにつながるセツルメント活動は、地域における住民による互助的な活動としての救済や貧困問題の地域的な改善を目的とした実践であるといえる。

◆「地域福祉」をどのように捉えるか

さて、このような展開のなかで生まれてきた地域福祉は、その論者により多様な捉え方がなされているが、ここではまず、次のように捉えておくことにする。

> 地域福祉とは、困難な状況に置かれている地域住民の生活上の課題解決（ニーズ充足）に向けて支援を展開することに加えて、「あらたな質の地域を形成していく内発性」（＝住民の主体性）を基本要件として、地域を舞台に（＝地域性）、そこで暮らす住民自身が私的な利害を超えて共同して公共的な課題に取り組むことで（＝共同性～公共性）、より暮らしていきやすいような地域社会にしていくこと、あるいはそのような地域に舞台としての地域そのものを変えていくこと（改革性）をいう（松端克文（2018）『地域の見方を変えると福祉実践が変わる』ミネルヴァ書房）。

地域福祉は、社会福祉と同義ではないし、ソーシャルワークと同義でもない。それは地域、すなわち具体的には広くても市町村域から自治会・町内会くらいのエリアにおいて、住民を主体として自治を形成する営みなり、生活していく上で困難な状況に置かれている住民の支援を意味する概念である。したがって、社会福祉を含めた社会保障制度を代替するようなものではない。むしろ国家による政策や制度と一定の緊張関係をもちながら、その発展を促したり、それが不備な場合には代替したりするような機能をもつ側面もあるが、それはあくまでも当該地域での実践であり、全国的な展開が見込めるものでない。あくまでも"地域"福祉なのである。

しかし、それだからこそ多様な展開の可能性を秘めているのである。これからの社会福祉の実践は、地域福祉の概念をぬきには成り立たない。現在、「地域共生社会」の実現に向けて、自治体ごとに取り組みが進められている「包括的・重層的」な相談支援体制の整備についても地域福祉の考え方をふまえてのものなである。

KCDラボ代表　松端　克文
（武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科教授）

＊毎号ホットなテーマを取り上げ、ヒントを提供します。

内部研修
～より働きやすい職場づくり～

生活介護事業所みのたに園にて、7月3日から12月3日にかけて、『よりよい職場環境づくりに向けて』をテーマに、1時間の研修を定期的に実施しました。この研修は、みのたに園の管理者からの要望で企画した研修で、職員全員にとって「より働きやすい職場づくり」を目指して、講義を聴いたりグループワークで話し合ったりしました。

第1回は7月3日に実施し、「働きやすい職場と働きがいのある職場の違い」などについて講義を聴き、まずは「目の前の仕事＝利用者支援」に真摯に取り組むことの大切さを学びました。また、私たちの仕事の基本である「福祉の原点＝困っている人、苦しんでいる人を救う・助ける」ことについても改めて確認をしました。最後に、20項目のチェックリストに取り組んでもらい、その集計結果を次回の研修で共有することにしました。

働きやすい職場？ チェック・リスト

	そう思わない～そう思う
1. 朝の挨拶がしっかりできる	1・2・3・4・5
2. お互いの意見を大切にして尊重しあえる	1・2・3・4・5
3. お互いに助け合うことができる	1・2・3・4・5
4. 相手の立場に立って気遣いできる	1・2・3・4・5
5. ありがとうと感謝の言葉が言える	1・2・3・4・5
6. チーム間、同僚間、上司部下の間でコミュニケーションがとれている	1・2・3・4・5
7. 情報共有もしっかりできている	1・2・3・4・5
8. 若手・非常勤が活発に意見を出せる	1・2・3・4・5
9. 仕事の話だけでなく、時には雑談もできる心の余裕がある	1・2・3・4・5
10. ピリピリした空気にならず、のびのびと仕事ができる	1・2・3・4・5
11. ネガティブな問題より、ポジティブな意見を受けとる人が多い	1・2・3・4・5
12. ネチネチせずにさっぱりとしている	1・2・3・4・5
13. セクハラやパワハラに厳しい	1・2・3・4・5
14. コンプライアンス（社会のルール・会社の規則）を守る風潮ができている	1・2・3・4・5
15. 個人個人が職務規程を遵守できている	1・2・3・4・5
16. 不平不満・悪口陰口・ボヤキ・いじめがない	1・2・3・4・5
17. 陰気な人が少なく明るい人が多い	1・2・3・4・5
18. 上司が感情に流され怒鳴ったりしない	1・2・3・4・5
19. 上司が部下一人ひとりの気持ちを理解できている	1・2・3・4・5
20. 上司のマネジメント能力が高い	1・2・3・4・5

"職場"について思うことを自由に書いてください

チェックリストは、「朝の挨拶がしっかりできる」「お互いの意見を大切にして尊重しあえる」「ありがとうと感謝の言葉が言える」などの人間関係の基本的な項目から、「若手・非常勤が活発に意見を出せる」「上司が感情に流され怒鳴ったりしない」など全体的な職場環境についての項目があり、これらの項目について「そう思わない～そう思う」を、「1～5」の5段階評価でチェックしてもらいました。

全体的な回答の分布は、平均値をあらわす「3」が多かったのですが、詳細は「そう思わない」という否定的な「1」「2」よりも、「そう思う」という肯定的な「4」「5」の回答の方が上回っていました。チェックした結果と記述回答を確認していくなかで、職場環境を考える上での課題がいくつか見つかったことから、課題解決に向けて継続的に研修を実施し、可能な範囲で話し合いを重ねていくことにしました。

3回目の10月22日には、「みのたに園をどのような事業所にしたいか」「そのためになにを行うか」という2点についてのアンケートを実施し、参加者全員で意見交換を行いました。管理者はもちろんのこと、それぞれの職員が自分たちの事業所＝働く場所についてどのように考えているか。だれかが考えてお膳立てしてくれることではなく、自分たちのこととして考えて、自分たちができること・やるべきことときちんと向き合ってみる。ひとりではなくチームとして取り組めることを探ってみる。この回の研修は、そんな機会になったように感じました。

4回目の12月3日は、「休憩時間のとり方」についてグループワークを行いました。活動プログラムの時間割りや、食事や食後の見守りなど、さまざまなことで休憩時間のとり方に苦慮している現状がありますが、多くの施設・事業所でも同様の問題を抱えているように思います。今回は3～4名で1グループとなり、あらゆる可能性を考えてたくさんの意見を出し合いながら、よりよい方向に進めるよう柔軟な話し合いを心がけてもらいました。

「前提」を取り払って、ほかの人の意見も参考にしながら話し合いを進めるなかで、業務内容やプログラム内容の見直し、休憩場所の設定、分散・時差での休憩、休憩者の明確な表示など、さまざまな意見が出ました。話し合いをしたからといって即解決！ということはむずかしいかもしれませんが、「自分たちのこと」として、「自分たちにできることはなにか」をみんなで話し合っていくことが重要で、次につながっていくことになるのだと思います。コロナ禍で大変な状況ではありますが、万全の感染予防対策を行いつつ、残りの研修も実施していきたいと思います。　（編集委員会）

春から始動♪　事業所内保育所
～有野ひだまり保育園～

今春、事業所内保育所“有野ひだまり保育園”をオープンすることになりました。場所は地域福祉サロン内で、神戸市こども家庭局子育て支援部から施設整備補助金等のご支援をいただき、年明けから改修工事が始まりました。

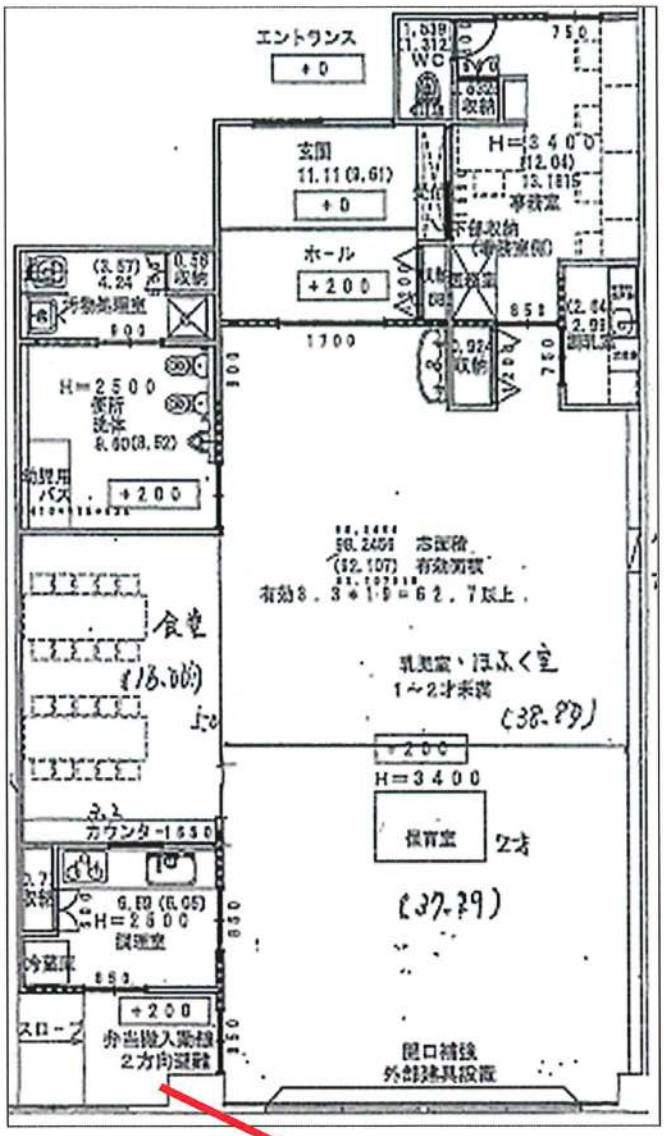
まだまだ準備段階ではありますが、今号では、工事中の“有野ひだまり保育園”の様子と、保育所開設準備委員会の担当者である大西本部長のインタビューを紹介します。

まずは工事中の風景を…。

地域福祉サロンは有馬街道に面した建物で、11 月まではしごとサポート北部と相談支援事業所が入っていました。サロン出入り口正面の、以前は広くあいていたスペースを改修して、“有野ひだまり保育園”がつくられていきます。

上の写真は、保育園の出入口になるところです。向かって左側は事務室、反対側はトイレなどのスペースになる予定です。工事中であるため、かなり広いように感じられましたが、食事をするところ、お昼寝をするところなど、これから変わっていき、広すぎず狭すぎず…といった空間になっていくようです。

保育所全体の設計図面です。地域福祉サロンのなかにすっぽりと入るイメージです。



昼食とおやつは、法人の給食調理室で調理したものが提供されます。もちろん利用されるお子さまそれぞれに合ったもので、アレルギーにも対応したものを提供します。

続いて、“有野ひだまり保育園”の詳細について、大西本部長にお話を伺いました。

―――対象年齢など、くわしいことを教えてください。

はい、対象年齢は0歳（6か月）から3歳未満（申し込み時点）のお子さまです。利用定員は12名で、職員数は園長を含めて常勤・非常勤合わせて7名です。時間は7時30分から18時30分までで、延長の場合は7時から19時になります。お休みは日曜日と祝日で、年末年始（12月29日～1月3日）や、災害などの非常時もお休みになります。

———3歳以上になったらどうなりますか。

連携保育所を中心に、北神区役所保育サービスコーディネーター等と調整をして、対応させていただく予定です。

———「事業所内保育所」ということですが、これは事業所の職員のみが利用する保育所なんでしょうか。

いえいえ、地域の方にも利用していただけます。事業所の従業員枠としては7名で、地域枠としては5名のお子さまの利用を募集しているところです。

———保育理念、基本方針をお聞かせください。

理念は、『児童の笑顔を大切にした保育』です。小さなお子さまをお預かりすることになるのですが、そのお子さま一人ひとりの気持ちを大切にした保育を実践していきたいと考えています。また、ご家族やこの地域、関連機関ときちんと連携した保育に取り組みたいと思っています。

基本方針は、『明るく家庭的な雰囲気での保育』です。お子さま一人ひとりを大切にするのはもちろんですが、安心で安全な保育を実施することで、お子さまの命と心を守っていきます。保育所に携わる職員も、明るく家庭的な雰囲気のなかでの日々の保育実践を通して、ご家族と一緒に子育ての楽しさを共有したいと思っているんですよ。

———"有野ひだまり保育園"の職員となる方々は、現在はどのような準備をされているのでしょうか。

開設準備委員会を立ち上げ、11月から、会議や研修を行っています。神戸常盤大学教育学部こども教育学科の橋本先生にご指導いただきながら、地域保育事業のひとつである事業所内保育事業のことについて、また根幹となる保育の質や、保育の魅力について改めて全員で学んでいる状況です。

———これからもコロナ禍の状況は続くと思われますが、保育所の感染対策はどのようにお考えですか。

すでに法人施設・事業所全体で取り組んでいる感染予防対策があるので、そこを基本にして、ご家族にも協力していただき、連携しながら感染予防に努めたいと考えています。利用されるお子さまたちはマスクがむずかしい年齢ですから…。なので、こまめな検温や消毒、換気など、よりていねいな取り組みをしていく必要があると思っています。

———まだ改修工事が始まったばかりですが、内装などはどのような感じでお考えですか。

利用されるお子さまたちが、ゆっくりと落ち着いて過ごせるような、そんな柔らかな色合いにできれば…と考えています。もちろん、床材や壁紙の厚さなど、最も大切な安全面への配慮を優先しています。さまざまな方々のご意見やご助言も参考にさせていただきながら決めていきたいと思いますが、職員となるメンバーが、これからほかの法人の保育所などを見学する予定もありますので、また新たな情報なども聞いておきたいと思います。

———それでは最後に、開設準備委員会担当者としてひとことお願いいたします。

ひとことでは無理ですが…。これまで、当法人は長年障害福祉に携わってきました。福祉型入所児童施設や児童発達支援センター、放課後等デイサービスなど、児童分野の施設・事業所が当法人にはありますが、「保育」に携わるのは初めてのことです。私自身としても初めてのことが多く、取り組む事柄一つひとつが障害福祉とは違うため、最初は右往左往することもありました…。

そんななか、たくさんの方々のお力添えをいただいて、なんとか進めていくことができています。春ごろには滞りなくオープンできるよう、開設準備委員会としてもみんなでがんばっていきたいと思います。

———ありがとうございました。

現在の地域福祉サロンはまだまだ改装工事中なので、ここで小さな子どもたちが過ごすというイメージもなかなかわいてきませんが、これから徐々に内装もでき上がっていき、春には"有野ひだまり保育園"がお目見えします。きれいに完成した保育所と、かわいい子どもたちの元気な声が響く春を楽しみに待ちたいと思います。　（編集委員会）

ちょっといいですか？大西ですけど…

－ 全集中 vs. Web －

◆ＩＴ技術の進化に驚く

昨年は、新型コロナ感染症の影響を受けて、この業界でも、多くの研修や会議が中止や延期となりました。また、○○大会などのイベントも開催が見送られ、同業の皆さまとお出会いする機会が激減し、寂しい一年となりました。

その一方で、インターネットを使った会議や研修が次々と開催されました。Web、オンライン、リモート、ネット、テレワーク…など、いまだにこれらの使い分けがよくわからないのですが、とりあえずは、パソコンやスマホを使って参加するという形態が増えたことは事実です。まだしばらくは、このような状況が続きそうです。ちなみにこの「Web」という言葉は、蜘蛛の巣を表す英単語だそうです。世界中に張り巡らされたインターネット回線が、蜘蛛の巣をイメージさせるという意味なのでしょう。いずれにしても、自分の部屋に居ながら（正確には、椅子に座りながらですが）、全国規模の会議や研修に参加できることは、すごいことですね。

◆「全集中」よりもWeb 優先

私自身も、この時代の流れに合わせて？パソコンと向き合いながらの会議や講演に何度か参加したのでが、どうも馴染めません。Web 会議は、そのシステム上、基本的に参加者が順番に発言する方式をとっていることが多く、機械的に淡々と進行していきますので、無駄な時間を省くことができ効率よく会議を運用できます。交通費や会場費、飲食費といった経費も削減できます。時間と経費の削減には、うってつけのシステムです。が、なぜか緊張感が漂ってしまうことと、なかなか集中できないこと、発言にリアル感を感じられないことなどが馴染めない理由になっているのだと思います。

オンラインでの講演も、講師が淡々と一方的にしゃべり続けるという方式が一般的です。講師には、会場（参加者）の空気が伝わりにくいなかでの開催となります。これは、逆に緊張感がなくなってしまうこと、説明用スクリーンが小さくしか映らないこと、講師の声（熱意）がダイレクトに伝わってこないことなどが、やはり馴染めない理由です。

いままでは研修も会議も講演も、人と人が顔を合わせて、雰囲気や相手の顔色を見ながら進めていくという方法でしかやってこなかったので、この画面越しでのやりとりにはやはり違和感があります。本音では、「全」員が「集」まる「中」で開催するほうが「全集中」できてよいとは思っているのですが、ここは時代の流れに流されてみようと思っているこのごろです。（大）

陽気会は「福祉ゾーン」としてのコミュニティの創造を目指します

陽気会は、1958 年 9 月 1 日に知的障害児施設おかば学園を開所し、62 年目を迎えています。
私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしていきやすくなるよう“デザイン”し、
陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、皆さまと力を合わせて実践していきます。

ラボサポーター(協力会員)募集中です

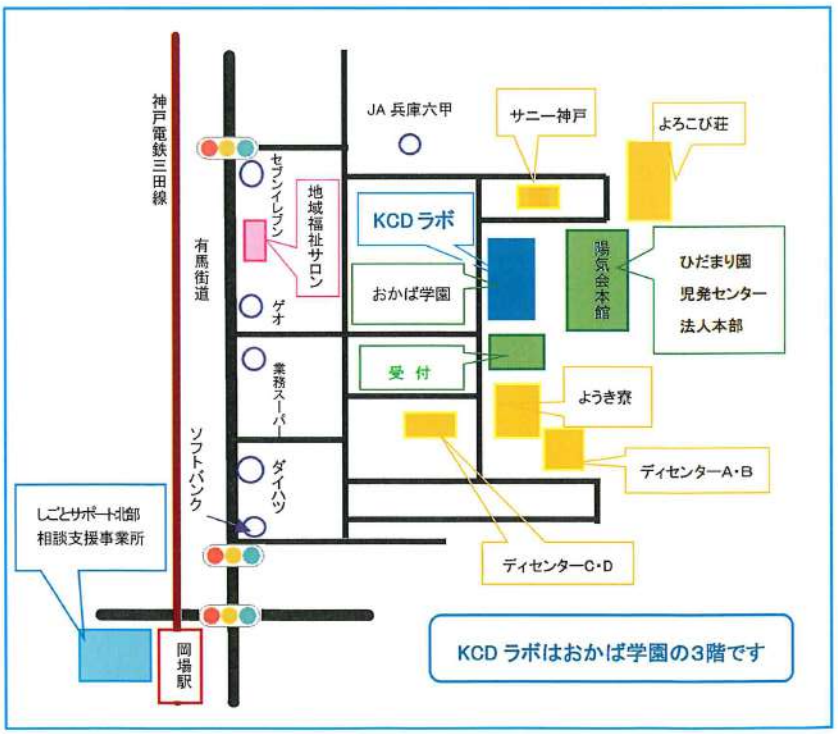
施設・事業所サポーター　年間 10,000 円

個人サポーター　年間 1,000 円

陽気会の SNS

Facebook　Instagram　Twitter

フォローよろしくお願いします

編集委員会：松端 克文
朝日 満子・河津 真美
大西 博之・大島 由香利

〒651-1313
神戸市北区有野中町 2-5-19
社会福祉法人陽気会
KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.
Tel：078(981)7271
Fax：078(981)0825
HP：http://youkikai.or.jp/
Email: kcdlab@youkikai.or.jp